The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	孤独感のエイジングパラドクスと社会関係の変化への適応に関する考察
Author(s)	豊島, 彩
Citation	生老病死の行動科学. 2016, 20, p. 13-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57151
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

生老病死の行動科学 2016 年　第 20 巻　pp.13 - 23

展望論文
Review Article

孤独感のエイジングパラドクスと社会関係の変化への適応に関する考察

A study on aging paradox of loneliness and adaptation for the transition in social relationship among older adults

（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）豊島　彩[1]
（Osaka University, Graduate School of Human Sciences）Aya Toyoshima

Abstract

The present study aimed to suggest the factors that explain the aging paradox of loneliness by reviewing studies from three approaches, attachment theory, gerontological theories, and preference of solitude. Attachment theory research indicated that attachment style relates with emotional loneliness and stabilizes with aging. However, this approach is not suitable for explaining social loneliness among older adults. Next, the author focused on some gerontological theories, especially Selective Optimization with Compensation. These theories suggested that older adults should adapt to the reduction in their social networks and limitations in social resources by using "primary control strategy" and "secondary control strategy". Although previous research has explored the former in detail, the latter type of strategies needs to be explored further using other approaches. Finally, studies on solitude supported the assertion that secondary control strategy should relate to preference for solitude as the ability to remain alone comfortable. Future studies should attempt to construct a model of aging development by including secondary control strategies

Key words: Loneliness, Subjective well-being, Attachment Theory Selective, Optimization with Compensation, Preference for Solitude

はじめに

我々人間 にとって他者との社会関係を築くことは生きていく上で重要な課題であり，心理学においても，良好な社会関係の維持・形成が主観的ウェルビーイング（Subjective well-being）に重要な役割を担うと考えられている（浦・南・稲葉, 1989; Heatherton & Wyland, 2003）。一方，社会集団から孤立することや集団になじめない状態は，社会関係を築くことにおいて危機的状況である。それに対し我々は不快感情，つまり孤独感（Loneliness）を感じ，社会から孤立する状態を避けるように生活しているとも考えられる（Cacioppo & Patrick, 2008 柴田訳 2010）。

孤独感についての心理学的研究は，Weiss（1973）や Perlman & Peplau（1981）に代表される概念や定義の整理を起源とし，現在まで多くの心理学的知見が蓄積されてきた。Perlman & Peplau（1981）は孤独感を“個人の社会的関係のネットワークにおいて，量的ないし質的な重大な欠損が生じた時に生起する不快な経験”と定義した（p.31）。Sermat（1978）では、孤独感は個人が望む理想とする対人関係と現状の対人関係の間の不一致としている。知見の蓄積に伴い，近年では孤独感は社会的孤立の主観的知覚であり，客観的な孤立状態とは区別されるものとして考えられている（Cacioppo & Hawkley, 2009; Cornwell, & Waite, 2009）。

Perlman & Peplau（1981）や Sermat（1978）の指摘のとおり，孤独感は不快な体験であるとされ，主観的ウェルビーイングを測定する一側面として扱われる場合もある（Windle & Woods, 2004）。いくつかの

[1] Correspondence concerning this article should be sent to; Aya Toyoshima, Graduate School of Human Sciences, Osaka University, Osaka, 565-0871, Japan
（e-mail:aya.t.6395@gmail.com）

研究では，抑うつ（Koenig, Isaacs, & Schwartz, 1994; Lau, Chan, & Lau, 1999）や攻撃的な行動（Crick & Grotpeter, 1995; Diamant & Windholz, 1981）と関連が示されている。その他にも睡眠状態の悪化や（Cacioppo et al., 2002），血圧の上昇（Cacioppo et al., 2000）といった健康状態への影響が示されている。さらに，孤独感は自殺を予測する心理的要因であり（Barnow, Linden, & Freyberger., 2004），孤独感が高まるのは心身にとって好ましくない状態であるとされる。

孤独感のエイジングパラドクス

我が国は他の先進国と比較し急速に高齢化が進み（Fukazawa, 2011），一人暮しの高齢者の割合も増加している（内閣府, 2014）。2012 年に実施された社会保障・人口問題基本調査では，独居高齢者のうち約 13%が人と会話する頻度が週に一度以下であると報告され，高齢の夫婦のみの世帯や高齢者全体における割合が約 3%に比べて高い値となっている（国立社会保障・人口問題研究所, 2013）。独居高齢者における社会交流の希薄化は，自宅での“孤立死”[2]につながると危惧される。当事者である高齢者に限らず，若い世代においても，高齢期に対する否定的なイメージとして孤独であることが他の年代に対するイメージよりも強く持たれている（保坂・袖井, 1988; 西村・平澤, 2009）。若い世代が持つ高齢者に対するイメージは，メディアの影響を受けやすいことが考えられ（高岡・岡本・榊原・小堀, 2011）“孤立死”が世間に大きく取り上げられることで，高齢期に対して一人で孤独なイメージが持たれていることが予想される。近年の人口の急速な高齢化に伴い，高齢者心理学において，感情的側面として高齢者の孤独感に関心がよせられてきた。その背景として，高齢になると配偶者の喪失により独居になる可能性が高く，社会的に孤立しがちとなり孤独感が高まるといった認識の存在が挙げられる（長田・工藤・長田, 1989）。

高齢期の孤独感の高さと関連する要因として，親しい友人がいないこと（Blau, 1961; Lowenthal & Haven, 1968）や自身の環境が統制不可能であること（Averill, 1973; Schulz, 1976）等が挙げられている。高齢期は友人や親戚との死別，不本意な退職，健康状態の低下といった孤独感を高めるとされるライフイベントが多く経験される（Perlman & Peplau, 1981）。また，独居といった居住形態の影響に関わらず，一人で過ごす時間の割合は年齢と共に増え，成人では 29%，退職後の高齢者では 48%に達するとされ（Larson, 1990），加齢に伴う社会的活動の減少は孤独感が高まるリスクとなることが予想される。

しかし， Sörensen & Pinquart（2001）のメタ分析の結果，高齢期は若い世代と比較して，報告される孤独感の高さは同程度とされ，いくつかの研究では高齢期は他の世代よりも孤独感が低いと報告されている（工藤・長田・下村, 1984; 長田他, 1989）。高齢者心理学では，高齢期は喪失経験が多くなるのに対し，主観的ウェルビーイングが維持される現象はエイジングパラドクス（Aging paradox; Löckenhoff & Carstensen, 2004; Mroczek & Kolarz,1998; 権藤他, 2005）と呼ばれる。社会関係と孤独感の加齢変化に関しても，退職による社会的役割の喪失や配偶者や親しい友人との別れといった，社会的ネットワークの縮小やそれによる社会的資源の制限に対して，孤独感が高まらない現象は，エイジングパラドクスの社会的側面を孤独感という心理的要因を介して解釈した枠組みであると言える。本研究では，この社会的側面に焦点を当て，加齢に伴うライフイベントの変化に対して孤独感が高まらない現象を“孤独感のエイジングパラドクス”とする。

まず考えられる要因の一つとして，孤独感は社会関係の質的側面との関連が強く，社会的ネットワークの縮小といった客観的指標の変化は直接影響しないことが挙げられている（Hawkley, Burleson, Bernston,& Cacioppo, 2003; Heinrich & Gullone, 2006）。藤原・来嶋（1989）と藤原・来嶋・神山・黒川（1988）では，孤独感は配偶者の有無や施設入所といった居住形態による直接的影響がみられないと報告された。西他（2015）は客観的指標では日常生活に問題が生じ兼ねない段階の孤立状態であっても，ほとんどの者は孤立しているという認識がないと報告している。つまり，高齢の一人暮らしは社会的に孤立しがちとなり孤独感が高まるといった認識は正しいとは言え

ない。前述した定義のとおり，孤独感は主観的知覚であり， 客観的な孤立状態とは同義ではなく， 一つの生起要因であることが考えられる。同時に，高齢期の孤独感や主観的ウェルビーイングに対して，加齢に伴う客観的な社会的要因のネガティブな影響が，想定よりも弱いということが考えられる（Figure1）。

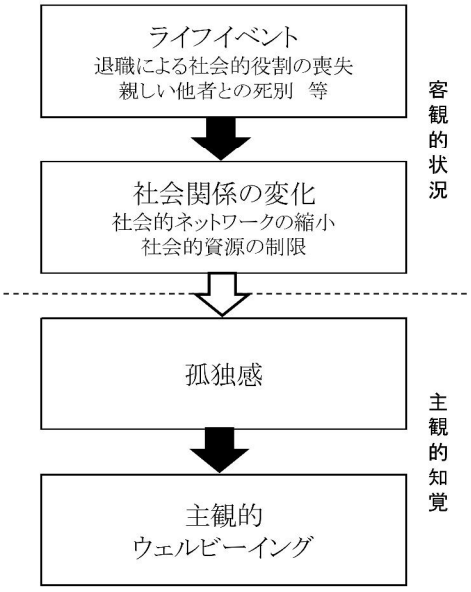

Figure 1. 孤独感のエイジングパラドクスの概要
Note: 白塗りの矢印は，加齢に伴い発生する確率が高くなるライフイベントによる社会関係の変化と孤独感の関連が想定よりも弱いことを意味する。

しかし，現状としてなぜ高齢期でその様な関係性の変化が見られるかの理論的説明は十分とは言えない。その背景として，心理学における孤独感という心理的概念についての研究と，老年学における高齢期の社会関係や主観的ウェルビーイングに関する研究がそれぞれの分野において独自に行われていることが考えられる。本論文では，孤独感や社会関係の加齢変化についての孤独感のエイジングパラドクスを説明する諸理論について整理し，今後の研究の展望について考察する。

孤独感研究における愛着理論によるアプローチ

まず, Weiss（1973）に代表される初期の孤独感研究において関連が主張されてきた愛着理論（Bowlby, 1969）の視点から加齢による影響を検討する。Weiss（1998）は孤独感を，職場や学校での人間関係といった社会関係の欠落として知覚される社会的孤独感（Social Loneliness）と，パートナーや親子といった愛着対象との関係性が要因となる情動的孤独感（Emotional Loneliness）に分類した。この二種類の孤独感について，社会的孤独感は，友人の数といった社会的ネットワークの影響を受けやすく，情動的孤独感は恋人や配偶者の存在が影響するとされる[3]。Weiss（1987）は，自身の孤独感研究の理論と愛着理論は密接に関連し，幼少期の親子関係の形成が青年期の孤独感に影響するとした。Ainsworth et al.,（1978）のストレンジ・シチュエーション法 （Strange Situation Procedure） における愛着スタイルのうち，安定型（secure; B type）は成人期以降も親密な対人関係を構築しやすいパーソナリティ特性やソーシャルスキルを獲得しやすく，他のタイプの者よりも孤独感は低いとされる。特に情動的孤独感との関連について，情動的孤独感は安定型で低く，回避型（avoidant; A type）で高いとされる（DiTommaso, Brannen-McNulty, & Best, 2004; Ditommaso, Brannen-McNulty, Ross, & Burgess, 2003）。

幼少期 に形成された愛着スタイルは成人期以降安定し（Kirkpatrick & Hazan, 1994），孤独感に深く関連することが報告されている（Conger, Cui, Bryant, & Elder, 2000）。孤独感のエイジングパラドクスとの関連について，いくつかの研究では加齢変化が検討されている。青年期の愛着スタイルを測定するアダルト・アタッチメント・インタビュー（Adult Attachment Interview; Main, Kaplan, & Cassidy, 1985）を用いた Mickelson, Kessler,& Shaver（1997）では，情動的孤独感と愛着スタイルの関連性を年代別に比較した結果，年齢が高いほど回避型（dismissing of detached）に当てはまる対象の割合が低くなることが報告された。Kafetsios & Sideridis（2006）は，青年期と比べ高齢期は回避型と孤独感の関連性が弱いこと

を示した。以上の研究は，横断的研究であり加齢に伴い愛着スタイルが変化するとは明確に主張できないが，孤独感のエイジングパラドクスを説明する要因の一つとして，高齢期は情動的孤独感が高い回避型の対象が少ないこと，孤独感に対する愛着スタイルの違いの影響が弱くなることが挙げられる。

しかし，愛着理論の視点から示された愛着スタイルやその関連性の変化といった要因だけでは，中年期以降の孤独感の変化を十分に説明できるとは言えない。中年期以降は，孤独感を生起させる重要な因子である幼少期の養護者であった親や青年期以降の愛着対象となる配偶者との死別が多く経験されると予測できる。また，社会的孤独感との関連において，退職や親しい友人関係の喪失といったライフイベントに伴う社会的ネットワークの縮小の影響については，愛着スタイルの視点からは，十分説明することができない。その背景として，愛着理論自体が幼少期に重きを置くため，高齢期の孤独感を説明するには不向きであると考えられる[4]。次章では，老年学の領域における高齢期の主観的ウェルビーイングを予測する理論体系の中で，死別のみではなく高齢期における喪失体験とその対処に関連する理論について考察する。

老年学的研究からのアプローチ

老年学における心理学的研究では，主観的ウェルビーイングが維持されるエイジングパラドクスについて，高齢者は社会的側面を含めた様々な喪失体験に対して，認知や行動を適応的に変容していると考えられている（中川, 2010）。本節では，加齢に伴う社会的ネットワークの縮小や社会的資源の減少への適応について扱う理論との関連を検討する。

離脱理論（Disengagement theory; Cumming & Henry, 1961）は，老年学におけるサクセスフル・エイジングの基本理論の一つとしてされる。離脱理論におけるサクセスフル・エイジングは，中年期までの発達段階とは異なり活動的生活からの離脱を受け入れることを意味し，社会から撤退することが本来備わっている発達的特性とみなす。孤独感のエイジングパラドクスにおいても，中年期以降は加齢に伴う社会関係の変化を受け入れることは発達的変化であり，その結果として孤独感が高まらずウェルビーイングが維持されると考えられる。しかし，中年期までの活動的生活をできる限り維持することをサクセスフル・エイジングとする活動理論の立場からの批判や，離脱理論の再検討が行われた結果，高齢者の現実の適応過程と異なることが示され（Havighurst, Neugarten & Tobin, 1968），離脱理論の再現性は確証されなかった。最終的に離脱理論と活動理論の論争は各個人のパーソナリティを維持することが適応的であるとする継続性理論（Atchley, 1989）の出現により，明確な結論が示されないまま収束に向かった[5]。これらの理論的論争の結果として，高齢期においても活動的生活を維持するか否かといった一義的な側面からは現在における多様な適応様式を説明できないことが示唆される（小田, 2004）。

その後，サクセスフル・エイジング研究における新たな理論として補償を伴う選択的最適化（SOC: Selective Optimization with Compensation）が提唱された（Baltes, Dittmann-Kohli, & Dixion, 1984; Baltes & Baltes, 1990）。SOC は加齢に伴う喪失に対する適応的発達の枠組みとして，獲得を最大とし損失を最小とするために自身の資源を最適化することを主張する。SOC では目標の選択（Selection）において，高齢期は身体機能の低下といった喪失に対して，重要な目標に絞り込み（Loss based selection），目標達成に向け最適な行動をとり（Optimization），不足した資源を利用可能な資源で補う（Compensation）とする。孤独感のエイジングパラドクスにおいては，退職といったライフイベントによる社会関係の変化や社会的資源の制限により以前の社会関係を維持することが困難となった場合，高齢者はより重要な他者との関係や，接触可能な身近な対象との関係を重視するといった方略をとることが考えられる。退職後の前期高齢期では各個人が重要としている関係性の対象との接触（例えば親子関係や夫婦関係の場合は，子供や配偶者との接触，ボランティアといった余暇活動での関係では，活動先での人間関係）は自己概念といった心理的過程を経てウェルビーイングにポジティブに影響する（Nakahara, 2013; 中原, 2014）。よって，社会的資源が制限される高齢期では，単純

に社会的相互作用の量が多いことが主観的ウェルビーイングに影響するのではなく，より重要な関係性を重視するといった，質的側面の影響が強くなることが考えられる。

また， Heckhausen & Schulz（1993:1995）は，SOC を発展させ，目標を達成するために環境に働きかける一次的制御方略（primary control strategy）と自己に働きかける二次的制御方略（secondary control strategy）を区別し，加齢に伴う資源の制限により目標達成が困難である場合，高齢者は後者を用いて目標を重視しなくなったり，自己防衛をしたりすることで対処すると考える。両者は SOC における Loss based selection に対応するとし，人は生涯にわたり目標達成が困難である場合，環境に働きかける一次的制御方略を用い，それが困難な状況に対しては自己の認識に焦点を当てる二次的制御方略を用いて自尊感情を維持すると考えられる（Haase, Heckhausen & Wrosch, 2013; Schulz, & Heckhausen, 1996）。

先述した Scrmat（1978）の研究に則れば，一次的制御方略とは，孤独感を抑えるために個人の社会的欲求水準に実際の社会関係をあわせるために環境に働きかけるといった方略であると考えられる。一方で，二次的制御方略で示される，自己に働きかけ社会的欲求水準を下げる方向により孤独感に対処し，主観的ウェルビーイングの低下を防ぐといった方略も考えられる。SOC やそれに関連する研究では，活用可能な資源があることが前提であり，後期高齢期以降や身体疾患等により，個人の資源が極端に制限される対象にも当てはまるかといった疑問は Baltes 自身が指摘している（Baltes, 1997）。活用できる資源が少ない対象において， 二次的制御方略は，主観的ウェルビーイングを維持するのにより有効であり，周囲との関係性に働きかけることが困難な場合，現実場面に合った欲求水準を自ら調整することで孤独感が高まらないことが考えられる。孤独感のエイジングパラドクスを説明するにあたり，個人の内的認知や志向性を変化させるといった二次的制御方略からのアプローチが有効であると考えられる。しかし，二次的制御方略に関する研究は比較的少なく，特に社会的側面に特化した検討は示されていない。そのため，具体的な研究方法や関連要因については知見の蓄積は十分であるとは言えないのが現状である。孤独感のエイジングパラドクスに対する SOC や二次的制御方略によるアプローチによる課題の一つとして，客観的な社会状況と主観的な孤独感が一致しないことを挙げる。老年学の理論では，社会的資源をいかに高齢者が活用するかに注目する一方，孤独感研究では客観的指標とは異なる不快体験であるという定義に基づいている。つまり，高齢期の研究では孤独感のエイジングパラドクスの現象自体を記述するに留まりがちであり，孤独感研究では孤独感の定義から不快感情が伴うことが前提となるため，孤独感が高まらない状態に関しては研究の枠組みから外れてしまう。したがって，客観的な孤立状態，つまり一人でいることがどの様に孤独感といったネガティブな感情の生起に至るかを説明した別の研究体系からの知見を整理し二次的制御方略との整合性を検証することが有効である。

Solitude 研究からのアプローチ

社会的ネットワークの縮小や社会的資源の制限に対し，個人が認知する欲求水準の変化といった二次的制御方略について検討するため，不快な体験としての孤独感ではなく，一人でいる状態（Solitude）自体にアプローチした研究からの知見を概観する。孤独感のエイジングパラドクスを検討するにあたり，孤独感に注目した研究による知見では，パラドクスの現象を記述するに留まり，社会的変数の影響が弱いことの関連要因を考察しにくいという側面がある。本節では Solitude 研究の知見を概観することで，社会関係の量的側面と孤独感という感情体験が生起する質的側面を区別し，それに対する加齢の影響を考察する。それにより，二次的制御方略で示される社会関係に対する欲求水準を下げる方向の方略について検討を試みる。

前節で述べた孤独感の定義のとおり，客観的な社会的孤立状態（一人でいること）と，主観的な感情体験である孤独感は同義ではなく，他者との接触がない状態は孤独感を生起させる一つの要因として考

えられる。Long & Averill（2003）や Burger（1995）に代表される，いくつかの社会心理学的研究では，一人でいることの問題点は孤独感が高まることや社会的孤立によりソーシャルサポートが欠如することであるため，一人でいる状態はポジティブな側面があることに注目している。Long, Seburn, Averill, & More （2003）は，一人でいる状態を，内省による自己の発見や内的平穏，そして創作的活動などに関る内向因子（Inner-directed）と，孤独感が高まる状態に関る孤独感因子（Loneliness），そして自然や宗教的存在，親密な他者といった自己以外のものとのつながりに関する外向因子（Outer-directed）の 3 つに分類した。その中で内向因子は，抑うつ傾向の低さや自尊感情の高さと関連することが示された。これらの知見を含め，先述した孤独感などの関連研究の知見を統合した結果，一人でいる時間はまず他者との関係性がある（Relational）か，関係性がない（Non-Relational）かに分類され，後者が孤立感，孤独感へと繋がると考えられる（Averill & Sundararajan, 2014; Figure 2 参照）。

Burger（1995）は，一人でいることへの志向性（独自志向性: Preference for solitude）の個人差が，一人でいることをポジティブな状態とする重要な要因であるとした。独自志向性とは，一人でいる状態を好むかどうかといった志向性の指標であり，“一人で過ごせる能力”とも例えられる（Long et al., 2003）。独自志向性が高い者は，自ら一人でいることを選択するため，一人で過ごす時間をポジティブに捉える傾向があると考えられる。一人でいる状態は，自身の考えを深め知的活動や創造性を高めるのに必要であり，独自志向性は主観的ウェルビーイングにポジティブに影響すると考えられる（Burger, 1995）。高齢期 は最も一人で過ごす時間の割合が高い（Larson, 1990）にも関わらず孤独感は他の年代と比較して高くないことから，高い独自志向性に基づいた一人の状態により，ネガティブな影響を受けない可能性が議論されている（Long & Averill, 2003）。

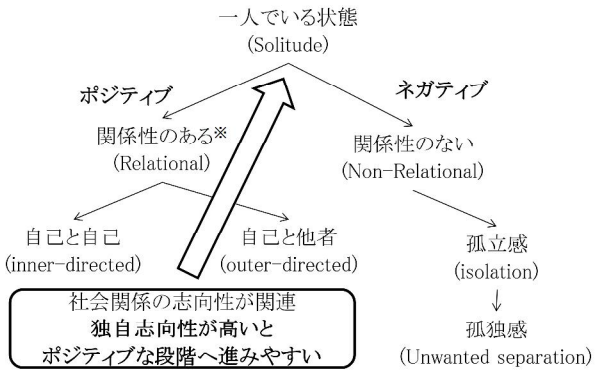

Figure 2.一人でいる状態から孤独感への知覚構造
Note, Averill & Sundararajan, 2014, p.101, Figure6.1 を参照に筆者が作成
※ 関係性のある状態とは、一人で過ごしているが、親密な他者との対人関係や宗教における信仰対象、自然的存在との関係を認識すること指す。

以上に挙げた研究から，一人で過ごす時間に対して，独自志向性といった個人の社会関係に対する志向性が主観的ウェルビーイングにポジティブに影響することが示されている。よって，個人の社会関係に対する志向性の変化は孤独感のエイジングパラドクスの関連要因として，社会関係の喪失に対して個人の内的知覚を現実の状況に対応させる二次的制御方略に相当すると考えることも可能である。ここで問題となるのが，前章で述べた二次的制御方略と独自志向性という概念が対応するかという点である。独自志向性は“一人で過ごせる能力”と例えられるように，個人内で縦断的変化があまり見られない性格特性とは異なる側面を持ち合わせる（Burger, 1995）。独自志向性が高いということは， 客観的孤立状態において Non-Relational の段階になりにくいことを意味し，一人でいることに対して価値を見出すこととも考えられる（Long & Averill, 2003）。独自志向性が高まることは，社会関係の喪失に対し，自己に働きかけ一人でいる状態を再評価することに関連すると考えられ（Figure3），独自志向性を二次的制御方略による対処に関連する指標として対応させることは十分可能である。しかし，独自志向性に関しては青年期以降の資料は示されておらず高齢期を対象とした研究はほとんど行われていないため，

独自志向性といった社会関係への志向性が年代により異なり，そのことが主観的ウェルビーイングに影響するかを検証する必要がある。

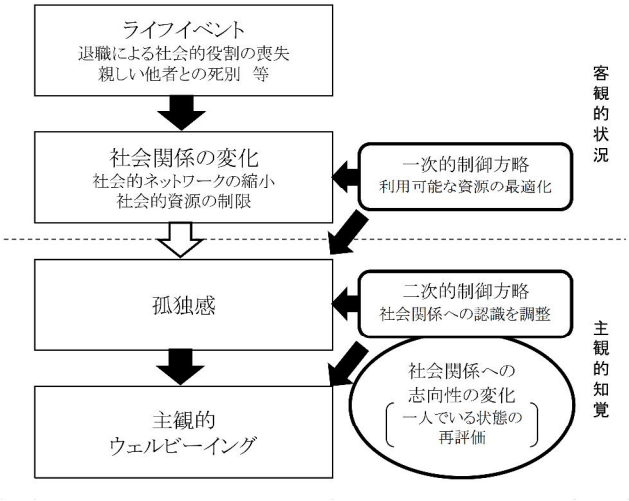

Figure 3.本研究における仮説モデル

結論と今後の展望

本論文では，孤独感のエイジングパラドクスを説明する諸理論について整理することを目的とした。第一に，初期の孤独感研究において関連が主張されてきた愛着理論からアプローチした場合，愛着対象との関係性が要因となる情動的孤独感との関連が考えられた。加齢変化を検討した研究から，加齢に伴い情動的孤独感が高い回避型が少なくなること，孤独感に対する影響が弱くなることによる影響が示された。しかし，高齢期を対象とした場合に，愛着理論の枠組みは不向きであること，社会的孤独感との関連は説明できないことが問題として挙げられた。第二に，高齢期の社会関係の変化との関連性を検討するために，老年学における理論，特に SOC に注目した。加齢に伴う社会的ネットワークの縮小や社会的資源の制限といった変化に対し，高齢者は外的な資源の最適化と内的認識を調節することの 2 つの方略により対処していると考えられた。しかし，後者に関しては孤独感のエイジングパラドクスの説明に至るまでの知見の蓄積や理論の進展が進んでおらず，孤独感研究との整合性を確認する必要性が挙げられた。第三に，客観的な孤立状態，つまり一人でいることがどの様にネガティブな状態に至るかを説明した Solitude 研究によるからのアプローチを試みた。その結果，一人でいることへの志向性，独自志向性の個人差が，客観的孤立状態と主観的孤独を分かつ要因であり，エイジングパラドクスの関連要因である可能性が示唆された。

以上，3 つのアプローチからの知見を概観した結果，孤独感のエイジングパラドクスを説明する要因として，外的な社会的資源を最適化する一次的制御方略と独自志向性といった社会関係の志向性が関連する二次的制御方略により主観的ウェルビーイングを維持することが挙げられた。今後の展望として，実証的研究の蓄積による加齢変化を示すことが考えられる。特に二次的制御方略に関して，本論文で述べた Solitude 研究は高齢期を対象とした知見がほとんどないため，年代による違いが見られるかを実証的に検証することが求められる。また，一次的制御方略による対処が困難な場合，二次的制御方略が求められると考えられるため，社会的資源が極端に制限され，一次的制御方略による対処が困難であると考えられる超高齢期や身体疾患がある者との比較検討も有効である。

引用文献

Ainsworth, M. D., Blehar, M., Waters, E., & Wall, S.（1978）. *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Atchley, R. C.（1989）. A continuity theory of normal aging. *The Gerontologist*, *29*, 183–190.

Averill, J. R.（1973）. Personal control over aversive stimuli and its relationship to stress. *Psychological Bulletin*, *80*, 286–303.

Averill, J. R., & Sundararahan, L.（2014） Experiences of solitude Coplan, R. J., & Bowker, J. C.（Eds）. *The handbook on solitude*（pp.90-108）.Malden: John Wiley & Sons.

Baltes, P. B., & Baltes, M. M.（1990）. Psychological perspectives on successful aging: The model of selective optimization with compensation. In Baltes, P. B., & Baltes, M. M. Eds. *Successful aging: Perspectives from the behavioral sciences*（pp. 1–34）. Cambridge: Cambridge University Press.

Baltes, P. B（1997）. On the incomplete architecture of human ontogeny. *American Psychologist*, *52*, 366–380.

Baltes,P. B., Dittmann-Kohli,F., & Dixion,R. A.（1984）. New perspective on the development of intelligence in adulthood: Toward a dual-process conception and a model of selective optimization with compensation *Life-Span Development and Behavior, 6*, 33-76.

Barnow, S., Linden, M., & Freyberger, H. J.（2004）. The relation between suicidal feelings and mental disorders in the elderly: results from the Berlin Aging Study（BASE）. *Psychological Medicine*, *34*, 741–746.

Blau, Z. S.（1961）. Structural constraints on friendships in old age. *American Sociological Review*, *26*, 429–439.

Bowlby, J.（1969）. *Attachment and loss: Attachment*（vol. 1）New York: Basic Books.

Burger, J.（1995）. Individual differences in preference for solitude. *Journal of Research in Personality*, *29*, 85–108.

Cacioppo, J. T., Ernst, J. M., Burleson, M. H., McClintock, M. K., Malarkey, W. B., Hawkley, L. C., … Berntson, G. G.（2000）. Lonely traits and concomitant physiological processes: the MacArthur social neuroscience studies. *International Journal of Psychophysiology : Official Journal of the International Organization of Psychophysiology*, *35*, 143–154.

Cacioppo, J. T., & Hawkley, L. C.（2009）. Perceived social isolation and cognition. *Trends in Cognitive Sciences*, *13*, 447–454.

Cacioppo, J. T., Hawkley, L. C., Crawford, L. E., Ernst, J. M., Burleson, M. H., Kowalewski, R. B., … Berntson, G. G.（2002）. Loneliness and health: Potential mechanisms. *Psychosomatic Medicine*, *64*, 407–417.

Cacioppo, J. T, & Patrick, W.（2008）. *Loneliness; Human nature and the need for social connection,* The Garamond Agency, Massachusetts.
（カシオポ J. T, & パトリック, W.（著） 柴田裕之（訳）（2010）. 孤独の科学　人はなぜ寂しくなるのか 河出書房新社）

Conger, R. D., Cui, M., Bryant, C. M., & Elder, G. H.（2000）. Competence in early adult romantic relationships: a developmental perspective on family influences. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 224–237.

Cornwell, E. Y., & Waite, L. J.（2009）. Social disconnectedness, perceived isolation, and health among older adults. *Journal of Health and Social Behavior*, *50*, 31–48.

Crick, N. R., & Grotpeter, J. K.（1995）. Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, *66*, 710–722.

Cumming, E., & Henry, W. E.（1961）. *Growing old, the process of disengagement*. Basic Books.

Diamant, L., & Windholz, G.（1981）. Loneliness in College Students: Some Theoretical, Empirical, and Therapeutic Considerati*ons. Journal of College Student Personnel*, *22*, 515-22.

DiTommaso, E., Brannen-McNulty, C., & Best, L. A.（2004）. Measurement and Validity Characteristics of the Short Version of the Social and Emotional Loneliness Scale for Adults. *Educational and Psychological Measurement, 64*, 99-119.

DiTommaso, E., Brannen-McNulty, C., Ross, L., & Burgess, M.（2003）. Attachment styles, social skills and loneliness in young adults. *Personality and Individual Differences*, *35*, 303–312.

藤原 武弘・来嶋 和美 （1989）. 老人ホームの老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査研究 広島大学総合科学部紀要, *12*, 55-64.

藤原 武弘・来嶋 和美・神山 貴弥・黒川 正流（1988）. 独居老人の孤独感と社会ネットワークについての調査研究 広島大学総合科学部紀要, *11*, 43-52.

Fukazawa, Y. （2011）. Solitary death: A new problem of an aging society in Japan. *Journal of the American Geriatrics Society*, *59*, 174–175.

権藤 恭之・古名 丈人・小林 江里香・岩佐 一・稲垣 宏樹・増井 幸恵・杉浦 美穂・蘭牟田 洋美・本間 昭・鈴木 隆雄 （2005）. 超高齢期における身体機能の低下と心理的適応――板橋区超高齢者訪問悉皆調査の結果から―― 老年社会科学, *27*, 327-338.

Haase, C. M., Heckhausen, J., & Wrosch, C.（2013）. Developmental regulation across the life span: Toward a new synthesis. *Developmental Psychology*, *49*, 964–72.

Havighurst, R. J., Neugarten, B. L., & Tobin, S. S. （1968）. Disengagement and pattern of aging. Neugarten, B. L （Ed.）, *Middle age and aging: A reader in social psychology*. （pp. 161- 172）. Chicago: University of Chicago Press.

Hawkley, L. C., Burleson, M. H., Berntson, G. G., & Cacioppo, J. T.（2003）. Loneliness in everyday life: cardiovascular activity, psychosocial context, and health behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 105–120.

Heatherton, T. F., & Wyland, C. L.（2003）. Assessing self-esteem. In L. J. Shane & C. R. Snyder（Eds.）, *Positive Psychological Assessment: A Handbook of Models and Measures.*（pp.219-233）. Washington, D C: American Psychological Association.

Heckhausen, J., & Schulz, R.（1993）. Optimisation by selection and compensation: Balancing primary and secondary control in life span development. *International Journal of Behavioral Development*, *16*, 287–303.

Heckhausen, J., & Schulz, R.（1995）. A life-span theory of control. *Psychological Review*, *102*, 284–304.

Heinrich, L., & Gullone, E.（2006）. The clinical significance of loneliness: A literature review. *Clinical Psychology Review 26*, 695-718.

保坂 久美子・袖井 孝子（1988）. 大学生の老人イメージ――SD 法による分析―― 社会老年学, *27*, 22-33.

Kafetsios, K., & Sideridis, G. D.（2006）. Attachment, social support and well-being in young and older adults. *Journal of Health Psychology*, *11*, 863–875.

Kirkpatrick, L., & Hazan, C.（1994）. Attachment styles and close relationships: A four-year prospective study. *Personal Relationships*, *1*, 123–142.

Koenig, L, J., Isaacs, A, M., & Schwartz, J, A, J.（1994）. Sex differences in adolescent depression and loneliness: why are boys lonelier if girls are more depressed? *Journal of Research in Personality*, *28*, 27–43.

国立社会保障・人口問題研究所 （2013）. 2012 年社会保障・人口問題基本調査 生活と支え合いに関する調査結果の概要 Retrieved from http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2012/seikatsu2012summary.pdf （2015 年 8 月 23 日）

厚生労働省（2008）.高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議（「孤立死」ゼロを目指して） Retrieved from http://www.mhlw.go.jp/houdou/2008/03/h0328-8.html（2015 年 10 月 16 日）

工藤 力・長田 久雄・下村 陽一 （1984）．高齢者の孤独に関する因子分析的研究 老年社会科学, 6, 167-185.

Larson, R. W.（1990）. The solitary side of life: An examination of the time people spend alone from childhood to old age. *Developmental Review*, *10*, 155–183.

Lau, S., Chan, D. W., & Lau, P. S.（1999）. Facets of loneliness and depression among Chinese children and adolescents. *The Journal of Social Psychology*, *139*, 713–729.

Löckenhoff, C. E., & Carstensen, L. L.（2004）. Socioemotionol selectivity theory, aging, and health: The increasingly delicate balance between regulating emotions and making tough choices. *Journal of Personality, 72,* 1395-1424.

Long, C. R., & Averill, J. R.（2003）. Solitude: An exploration of benefits of being alone. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, *33*, 21–44.

Long, C. R., Seburn, M., Averill, J. R., & More, T. A.（2003）. Solitude experiences: varieties, settings, and individual differences. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *29*, 578–583.

Lowenthal, M. F., & Haven, C.（1968）. Interaction and adaptation: Intimacy as a critical variable. *American Sociological Review, 33*, 20-30.

Main, M., Kaplan, N., & Cassidy, J.（1985）. Security in infancy, childhood, and adulthood: A move to the level of representation. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, *50*, 66–104.

Mickelson, K. D., Kessler, R. C., & Shaver, P. R.（1997）. Adult attachment in a nationally representative sample. *Journal of Personality and Social Psychology*, *73*, 1092–1106.

Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M.（1998）. The effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*, 1333.

内閣府 （2014）．平成 26 年版高齢社会白書 Retrieved from http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/gaiyou/s1_2_1.html （2015 年 8 月 23 日）

中川 威 （2010）．高齢期における心理的適応に関する諸理論 生老病死の行動科学, *15*, 31-39.

Nakahara, J. （2013）. Effects of social activities outside the home on life satisfaction among elderly people living alone. *International Journal of Psychological Studies, 5,* 112-120.

中原 純 （2014）．シルバー人材センターにおける活動が生活満足度に与える影響――活動理論（activity theory of aging）の検証―― 社会心理学研究, *29*, 180-186.

西 真理子・深谷 太郎・小池 高史・小林 江里香・野中 久美子・村山 洋史・鈴木 宏幸・新開 省二・藤原 佳典 （2015）．客観的には孤立していても孤立感のない高齢者の特徴――首都圏高齢者の地域包括的孤立予防研究（CAPITAL study）より―― 日本老年社会科学第 57 回大会報告要旨, 163.

西村 純一・平澤 尚孝（2009）. SD 法による高齢者イメージの世代差と性差の研究 人間文化研究所紀要 *3*, 33-42.

小田 利勝 （2004）．社会老年学における適応理論再考 神戸大学発達科学部研究紀要, *11*, 361-376.

長田 久雄・工藤 力・長田 由紀子 （1989）．高齢者の孤独感とその関連要因に関する心理学的研究 老年社会科学, *11*, 202-217.

Perlman, D., & Peplau, L. A.（1981）. Toward a social psychology of loneliness. *Personal relationships, 3*, 31-56.

Schulz, R., & Heckhausen, J.（1996）. A life span model of successful aging. *The American Psychologist*, *51*, 702–714.

Schulz, R. （1976）. Effects of control and predictability on the physical and psychological well-being of the institutionalized aged. *Journal of Personality and Social Psychology*, *33*, 563–573.

Sermat, V. （1978）. Sources of loneliness. *Essence*, *2*, 271-286.

Sörensen, S., & Pinquart, M.（2001）. Influences on loneliness in older adults: A meta-analysis. *Basic and Applied Social Psychology*, *23*, 245–266.

高岡 哲子・岡本 麗子・榊原 千佐子・小塀 ゆかり（2011）. 看護学生が老年看護学概論の講義終了時に持った高齢者イメージの検討　北海道文教大学研究紀要, *35*, 25-35.

浦 光博・南 隆男・稲葉 昭英 （1989）. ソーシャル・サポート研究――研究の新しい流れと将来の展望―― 社会心理学研究, *4*, 78-90.

Weiss, R. S.（1973）. *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, MA: MIT Press.

Weiss, R.S.（1987）. Reflections on the present state of loneliness research, *Journal of Social Behavior and Personality, 2*, 1-16.

Weiss, R. S.（1998）. A taxonomy of relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, *15*, 671–683.

Windle, G., & Woods, R, T.（2004）. Variations in subjective wellbeing: the mediating role of a psychological resource. *Ageing and Society*, *24*, 582–602.

---

[2] 孤立死という用語について厚生労働省(2008)の発表では，支援が必要とされる対象を限定することを避けるため明確に定義しないこととしているが，社会の中で避けるべき現象として“社会から「孤立」した結果，死後，長時間放置されるような”状態であるとしている。

[3] 両者は概念上では分類されて扱われるが，相互に関連しあうものとされ，UCLA 孤独感尺度といった単一次元尺度では厳密な区別はなされない。愛着理論と孤独感の関連を検討する場合，社会的孤独感と情動的孤独感をそれぞれ測定する DiTommaso et al., (2003)の尺度を使用することで両者を区別する研究が多い。一方，両者を区別せず，不快体験としての孤独感の頻度と他の要因との関連性を検討する研究もある。よって，両者は概念上では区別されるが，研究の目的に沿って同一の孤独感として扱う立場と，さらに詳細に分類して研究する立場がある。

[4]愛着対象の喪失による孤独感への影響は高齢期にもみられると考えられるが，本稿では，集団レベルにおける孤独感が相対的に低いことを問題とするため，愛着理論における愛着対象の喪失の影響だけでは説明できないとする。

[5] 活動理論と継続性理論について，活動理論は高齢期に活動的生活をできる限り維持することをサクセスフル・エイジングとするため，孤独感のエイジングパラドクスの前提である，社会関係において活動性の低下の影響が弱いことについては理論の枠組みに含まれないと考えられる。継続性理論については，個人のパーソナリティによりサクセスフル・エイジングの要因が異なると考え，孤独感のエイジングパラドクスについては個人差として説明されるため，集団レベルで孤独感の低さや主観的ウェルビーイングの維持についての説明は困難であると考えられる。